

称号及び氏名	博士（言語文化学） 陳 建明
学位授与の日付	平成23年3月31日
論文名	日本語と中国語の比較に関わる程度副詞の対照研究 —「程度増加型」副詞を中心に—
論文審査委員	主査 張 麟声 副査 野田 尚史 副査 大形 徹

論文要旨

本研究は日本語の「もっと」「さらに」「いちだんと」「いっそう」「なお」「なおさら」と中国語の「更」「更加」「还」「再」「越发」を中心に、両言語の「程度増加型」副詞の構文的・意味的共通点と相違点を体系的に記述したものである。

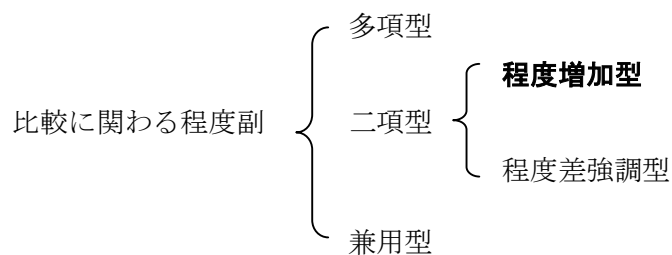
全部で7章からなる。序章、第一章、第二章は序論で、第三章、第四章、第五章は本論である。そして、まとめの部としての第六章において、本研究のまとめと今後の課題が述べられている。

(1) 序論の部

序章では、本研究の目的・対象及び研究方法を示した。

第一章では、日本語と中国語の比較に関わる程度副詞の研究について、私見を付して概観した。

第二章では、一定の基準で比較に関わる程度副詞を下位分類し、「程度増加型」副詞の比較に関わる程度副詞における位置づけを明示した。



また、本研究の考察対象となる「程度増加型」副詞の選定を行い、日本語の「程度増加型」副詞のうち、「もっと」「さらに」「いちだんと」「いっそう」「なお」「なおさら」の6語、中国語の「程度増加型」副詞のうち、「更」「更加」「还」「再」「越发」の5語に考察対象を絞った。

(2) 本論の部

第三章では、①従属節に生起するあり様、②モダリティと共起するあり様、③名詞(述語)修飾ができるかどうか、④程度の差を表す量的語句を伴えるかどうか、⑤主題の前に現れ得るかどうか、⑥コピュラを伴って述語に立つことができるかどうかの6つの構文的特徴から、日本語と中国語の「程度増加型」副詞の構文上の相違を考察した。

6つの構文的特徴の中で、最も大きな違いが見られたのは④程度の差を表す量的語句を伴えるかどうか、⑤主題の前に現れ得るかどうか、⑥コピュラを伴って述語に立つことができるかどうかという構文的特徴である。

程度の差を表す量的語句を伴う構文的特徴では、日本語の「程度増加型」副詞の中で、「さらに」だけが程度の差を表す量的語句を伴えるが、中国語の「程度増加型」副詞はすべて程度の差を表す量的語句を伴うことができる。この構文的特徴は中国語の「程度増加型」副詞に普遍的に見られるが、日本語の「程度増加型」副詞にはあまり見られない。これは程度副詞の性質の違いというより、日本語と中国語の表現の違いといえるかもしれない。表にまとめたものを以下表1に示す。

表1 日中の「程度増加型」副詞が程度の差を伴うあり様の相違

日本語の「程度増加型」副詞	程度の差	中国語の「程度増加型」副詞
さらに	数値	还・再
さらに	小差・倍数	更・更加・还・再・越发
なし	程度の大差	更・更加・还・再・越发

主題の前に現れ得るかどうかの構文的特徴では、日本語の「さらに」「いちだんと」「いっそう」「なおさら」は主題の前に現れ得るが、「もっと」「なお」は現れない。これに対し、中国語の「程度増加型」副詞はすべて出現不可能である。この構文的相違は日本語は語順が比較的自由であるのに対し、中国語は語順の制限が厳格であるという両言語の基本的な性格に一致していると考えられる。

考察した結果は下の表2に示すとおりである。

表2 日中の「程度増加型」副詞が主題前に出現するあり様の相違

日本語の「程度増加型」副詞	主題前の出現	中国語の「程度増加型」副詞
さらに・いちだんと ・いっそう・なおさら	可能	なし
もっと・なお	不可能	更・更加・还・再・越发

コンピュータを伴って述語にたつことができるかどうかの構文的特徴では、日本語の「いっそう」「なおさら」はできるが、「もっと」「さらに」「いちだんと」「なお」はできない。中国語の「程度増加型」副詞はすべてできない。まとめると表3のようになる。

表3 日中の「程度増加型」副詞がコンピュータを伴って述語に立つあり様の相違

日本語の「程度増加型」副詞	コンピュータを伴って述語に立つ可能性	中国語の「程度増加型」副詞
いっそう・なおさら	有	なし
もっと・さらに ・いちだんと・なお	無	更・更加・还 ・再・越发

従属節に生起するあり様では、日本語の「もっと」と中国語の「更」「更加」は似ており、殆どすべての従属節に用いられる。一方、「なお」「なおさら」は譲歩・条件等の従属節にも用いられず、最も厳しい。

考察した結果は以下の表4に示すとおりである。(()の中の副詞は使用できるが、制限がある。以下同。)

表4 日中の「程度増加型」副詞の従属節に生起するあり様の相違

日本語の「程度増加型」副詞	従属節	中国語の「程度増加型」副詞
もっと	譲歩節	更・更加・还 ・再・越发
もっと・さらに (いちだんと・いっそう)	条件節	更・更加・还・再 (越发)
もっと・さらに ・いちだんと・いっそう	目的節	更・更加 (再・越发)
もっと・さらに ・いちだんと・いっそう	疑問表現 ・並列節	更・更加・还 ・再・越发
もっと・さらに ・いちだんと・いっそう	付帯状況	更・更加・越发
もっと・さらに・いちだんと ・いっそう・なお	形式名詞 ・連体節	更・更加・还 ・再・越发
もっと・さらに・いちだんと ・いっそう・なお・なおさら	原因・理由 ・逆接節	更・更加・还 ・再・越发

「程度増加型」副詞がモダリティと共起するあり様では、日本語の「もっと」と中国語の「再」は最もよくモダリティ要素と共起し、大変似通っている。

これに対し、日本語の「なお」「なおさら」は意志・希望を表すモダリティ要素とだけ共起でき、厳しく制限されている。

考察した結果をまとめると、以下の表 5 のようになる。

表 5 日中の「程度増加型」副詞がモダリティと共起するあり様の相違

日本語の 「程度増加型」副詞	モダリティ	中国語の 「程度増加型」副詞
もっと	要求・依頼	再
もっと (さらに・いちだんと・いっそう)	勧誘	再 (更・更加)
もっと・さらに	問いかけ	更・更加・还 ・再・越发
もっと・さらに・いちだんと ・いっそう・なお・なおさら	意志・希望	更・更加・还 ・再・越发

最後に、名詞(述語)修飾ができるかどうかの構文的特徴では、日本語の「もっと」「さらに」と中国語の「再」だけは時空間名詞を修飾できる。一方、両言語の「程度増加型」副詞はすべて「程度性名詞」を修飾できる。換言すれば、「程度性名詞」を修飾する面では、日本語と中国語の「程度増加型」副詞は共通していると言える。

考察した結果をまとめると、表 6 のようになる。

表 6 日中の「程度増加型」副詞の名詞修飾のあり様の相違

日本語の 「程度増加型」副詞	名詞	中国語の 「程度増加型」副詞
もっと・さらに	時空間名詞	再
もっと・さらに・いちだんと ・いっそう・なお・なおさら	程度性的 名詞	更・更加・还 ・再・越发

引き続き第四章では、①語用論的否定の意味が含まれるかどうか、②程度の差が焦点化されるかどうか、③弱い時間性が含まれるかどうか、④強い時間性が含まれるかどうか、⑤「進展性」が含まれるかどうか、⑥感嘆の暗示が含まれるかどうか、⑦必然性が含まれるかどうか、⑧意外性が含まれるかどうか、⑨当然性が含まれるかどうかの 9 つの意味的特徴から、日本語と中国語の「程度増加型」副詞の意味的相違を考察した。各語の意味上の異同をまとめると、以下の表 7 のようになる。

表7 日中の「程度増加型」副詞の意味上の異同

日本語の「程度増加型」副詞	意味要素	中国語の「程度増加型」副詞
もっと	語用論的 否定の意味	再
さらに	程度の差の 焦点化	还・再
さらに	弱時間性	更加
いちだんと・いっそう	強時間性	越发
なお	意外性	还
なし	進展性	越发
いちだんと	感嘆の暗示	なし
いっそう	必然性	なし
なおさら	当然性	なし

日本語と中国語の「程度増加型」副詞の意味的特徴から両言語に共通する特徴が見られた。

① 一般に異なる事態の程度の比較と、事態の時系列的変化の比較があり、日本語と中国語はともにそれぞれの種類の比較に特化した形式が存在する。

例えば、両言語には程度の大小関係の比較に重点を置く程度副詞と程度の増加に重点をおく程度副詞がともに存在する。また、両言語では、単純に二者の大小関係を表す程度副詞と二者の大小関係の比較に重点に置きながら程度の増加を示す程度副詞もともに使い分けられている。

② 日本語と中国語はともに比較基準を否定する含意のある副詞を持っている。

これは優劣をつけることに相当する比較行為の性格に合致している。

一方、両言語の間に存在する最も大きな違いは時間軸を遡っての比較に使用できない「程度増加型」副詞が異なる事態の比較に用いられるかどうかにあると言える。

両言語のこの類の「程度増加型」副詞がともに時間軸を遡っての比較に用いられないのは時間の流れに沿っての程度の増加を表す基本的な性質を持っているためと考えられる。

しかし、日本語の時間軸逆行の比較に使用できない「程度増加型」副詞が異なる事態の程度の比較に用いられるのはその基本的な性質から外れた或いはそこから拡張した用法を持つことを示している。これに対して中国語の「程度増加型」副詞はそのような基本的な性質から拡張した用法を持っていない。

第五章では、「否定的用法」を持つ日本語の「もっと」と中国語の「再」を検討した。結論は以下ようになる。

「もっと」の「否定的用法」は話し手が意図的に比較基準を否定することから生まれた用法である。

「再」の「否定的用法」は程度の比較を表す意味が希薄化し、程度が増加する意味が前景化したことから派生した用法である。

(3) まとめ部

第六章では、まず本研究の流れ及び成果についてまとめた。それから、今後の課題として次のようなものを挙げた。

- i 本研究の成果は異なる言語体系に属する日本語と中国語のどのような基本的な性格を反映しているのかについてさらに検討すること。
- ii 他の比較に関わる程度副詞、ないしは比較を表さない程度副詞も研究の視野に入れ、両言語の程度副詞の対照研究を進めていくこと。

学位論文審査結果の要旨

1 この論文の意義

日本語文法の研究は、長い間、述語を作る動詞、形容詞、助動詞類、及び文法関係や文法機能を表わす助詞類の研究にライトが当てられ、副詞は相対的におろそかにされてきた。また、一口に副詞といっても、陳述副詞に関しては、森本順子(1994)『話し手の主観を表わす副詞について』や、杉村泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』などが出版されているが、程度副詞については、一書をなすまとまった研究はまだない。

そのような状況において、この論文は、まず程度副詞を、比較に用いられるものと比較に用いられないものとに分け、それから、比較に用いられる副詞に対して、さらなる下位分類を行った。そして、その結果としての「程度増加型」という一下位分類を研究対象とし、その類としての特徴、及びそれに属する副詞の使い分けを、中国語と対照する形で、丁寧に記述を試みた。程度副詞に対する本格的な記述研究の第一歩として、その意義は大きい。

2 この論文の概要

別紙1「学位論文の内容の要旨」が示す通り、この論文は序章を入れて、合わせて7章からなっている。序章から第2章までは導入部であり、それにおいて、研究の対象、目的、方法や論文全体の構成が提示され、先行研究に関する

分析が行われている。第3章から第5章までが本論であり、終章の第6章では、研究の結論がまとめられ、今後の研究課題が示されている。

3 この論文の評価

この論文は、テーマの選定及び先行研究の取り扱い、研究の方法及び論述の展開、研究の結果のそれぞれの項目について、次のように評価できる。

テーマの選定及び先行研究の取り扱い：1で述べた通り、この論文では、程度副詞の下位分類を論理的に行い、その結果として得た一下位分類を研究対象としたものであり、テーマが十分に絞り込まれている。また、対象となる日本語の副詞、中国語の副詞、及び、両言語の対象副詞に関する対照研究における従来の研究を丁寧に検討し、その有益な部分を、副詞の分類、日中両言語の個々の副詞の記述、及び、対照研究などさまざまな分野にわたって、活かしている。

研究の方法及び論述の展開：この論文は、記述言語学及び対照言語学の手法を用いて、まとめられたものである。まずデータとして、『CD-ROM版新潮文庫の100冊』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、北京大学中国語研究センターCCLコーパスなどをはじめ、日本語と中国語のGoogle検索エンジンなども駆使して、大量の用例を集めた。それから、そのような用例を用いて、日本語と中国語の、研究対象となる副詞について、その意味・用法を1つ1つ精査し、丁寧に記述を行っている。また、帰納的分析を基本とする記述言語学の手法を用いているだけに、論述は、首尾一貫として論理的に行われている。

研究結果：従来ほとんど手つかず状態の、現代日本語の「程度増加型」副詞の、グループとしての特徴の一斑が明らかにされ、また、個々の「程度増加型」副詞の間の、構文的、意味的あり方、及び互いの使い分けが記述された。さらに、中国語の「程度増加型」程度副詞との対照研究を通して、両言語間の異同の一部が解明されている。このような研究成果は、日本語や中国語の記述的研究の角度から評価できるだけでなく、言語の類型的特点をとらえる際も、対中国語話者の日本語教育を考える場合も有用なものである。

4 審査委員会の結論

この論文は、堅実な記述言語学的、及び、対照言語学的方法を用いて、豊富な用例を観察し、説得力の高い結論を出した。

本審査委員会は、全員一致で、この論文が以下の人間社会学研究科言語文化学専攻の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると判断する。

- 1) 研究テーマが絞り込まれている。
- 2) 研究の方法論が明確である。

- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。